盛岡城遠曲輪跡

－第22・23次調査 会社事務所建設・寺院建設に伴う緊急発掘調査報告書－

2022.12

株式会社 駒木葬祭 ・ 宗教法人 連正寺

盛岡市教育委員会

例　言

1　本書は、岩手県盛岡市南大通二丁目378番１・379番８・379番９地内、及び南大通二丁目378番４・379番１地内に所在する盛岡城遠曲輪跡第22・23次調査の発掘調査報告書である。第22次調査は会社事務所建設に伴い、また第23次調査は寺院建設に伴い、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

2　第22次調査は事業者の株式会社 駒木葬祭と、第23次調査は事業者の宗教法人 蓮正寺と、盛岡市教育委員会との間で締結された協定書、及び盛岡市との間で締結された委託契約書に基づき、盛岡市遺跡の学び館が野外調査及び出土資料整理並びに報告書作成を行った。

3　発掘調査及び本書の編集・執筆は、盛岡市遺跡の学び館 津嶋知弘・鈴木俊輝・佐々木あゆみが担当した。なお、野外調査及び出土資料整理には、以下の作業員が従事した（五十音順）。

秋元理恵、佐々木富士子、佐野光代、袴田英治、袴田千佳、樋口泰子、細田幸美、村上幸子、村上美香、山田聖子

4　遺構平面位置は、平面直角座標Ｘ系（日本測地系）を座標変換した調査座標で表示した。

調査座標原点　Ｘ－32,000　Ｙ＋27,000　＝　ＲＸ±０　ＲＹ±０　（盛岡城跡・盛岡城外曲輪跡と共通）

5　高さは、標高値をそのまま使用した。

6　層相の観察は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を使用した。

7　遺構記号・番号は、次のとおりとした。

記号：古代竪穴建物跡 ＲＡ、近世堀跡 ＳＤ、近世土塁跡 ＳＦ、近世～近代石垣 ＳＸ、近代礎石列 ＳＢ

番号：近世西辺 100～199、北辺 200～299、北東辺 300～399、東辺 400～499、南東辺 500～599、南辺 600～699

先史・古代 001～099、近代 901～999

8　古代の竪穴住居跡のカマド方向は、カマド本体中心(焚口)から煙道先端(煙出し)を結んだ線の方向の傾きとした。

9　古代の土器区分は、土師器・須恵器・あかやき土器に分類した。『あかやき土器』の名称は、ロクロ使用の酸化焼成土器（坏類、甕類、鉢）に使用し、ロクロ使用の内面黒色処理の坏類は土師器に分類した。

10　石垣写真測量及び遺跡空中写真撮影は、株式会社タックエンジニアリングに委託した。

11　出土資料の自然科学分析及び保存処理は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

12　発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管している。

目　次

Ⅰ　遺跡の環境
1　遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・1
2　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・2
3　これまでの調査・・・・・・・・・・・・2
Ⅱ　調査の経過
1　第22次調査・・・・・・・・・・・・・・5
2　第23次調査・・・・・・・・・・・・・・6
Ⅲ　調査成果
1　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・6
2　近世～近代の遺構と遺物・・・・・・・9
3　古代の遺構と遺物・・・・・・・・・・15
Ⅳ　総括
1　調査のまとめ・・・・・・・・・・・・・16

写真図版

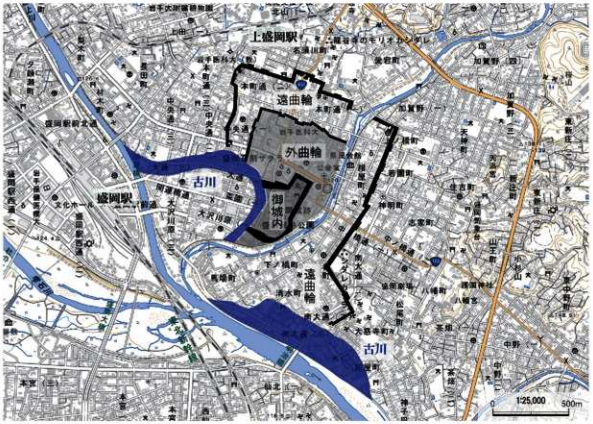
報告書抄録

Ⅰ　遺跡の環境

1　遺跡の位置

位置と歴史　近世城郭である「盛岡城」は盛岡市の中心部に位置し、その城下町は岩手県の県庁所在地として栄えた近代以降の市街地の骨格となっている。豊臣政権下の慶長２年（1597）３月６日、戦国大名であった南部信直（盛岡藩祖）が嫡子利直（初代藩主）に命じて築城が始められた（築城開始の年次については他に文禄２年、慶長３年など諸説あるが、『祐清私記』慶長２年の「不来方新築城勘初（鍬初）」に従う）。藩政時代初期には三戸城（青森県三戸町）、福岡城（二戸市）、郡山城（紫波町）を居城としながら築城が進められたが、寛永10年（1633）５月に２代藩主南部重直が入城して以来、明治維新の廃藩置県に至るまで、南部氏の居城として存続した。

地形と構造　藩政の中枢で「御城内」と呼ばれた内曲輪（史跡盛岡城跡）は、旧北上川と中津川の合流点の丘陵を利用して築かれており、本丸、二ノ丸、三ノ丸、腰曲輪は総石垣となっている。この内曲輪の北側、現在の内丸地区には堀と中津川、土塁で区画された外曲輪があり、藩主居館「御新丸」や重臣屋敷が存在した。そのさらに外側には堀と土塁を廻らした遠曲輪があり、外曲輪の西側、北側と、中津川を越えた北東側、東側、南東側、南側を囲んでいた。慶長14～17年（1609～12）に、中津川には上の橋、中の橋、下の橋が架けられており、このころまでに城下の整備が進み、外曲輪や遠曲輪の構築が完了したと推定される。



第１図　盛岡城跡（御城内）・外曲輪跡・遠曲輪跡位置図（1:25,000）〔地理院地図に加筆〕

城下への出入口として各辺には惣門が設けられ、番所が置かれた。藩政時代後期、西辺南部に仁王惣門、西辺北部に四ツ家惣門、北辺中央に花屋丁惣門、北辺東端に下小路惣門、北東辺に加賀野惣門、東辺南部に八幡惣門、南辺西端に新穀丁惣門があった。正保４年（1647）に幕府へ提出した「奥州盛岡平城絵図」（国立国会図書館内閣文庫所蔵、重要文化財）には遠曲輪の土塁、堀が描かれており、加賀野惣門付近に「堀口広五間、深二間、水少有」と記されている。

規模・地質　遠曲輪のうち、埋蔵文化財包蔵地「盛岡城遠曲輪跡」として登録されているのは絵図面と発掘調査成果から推定される堀跡と土塁跡の範囲であり、西辺は中央通１丁目・２丁目・本町通２丁目・３丁目、北辺は本町通１丁目・２丁目、北東辺は上ノ橋町、東辺は上ノ橋町・若園町・神明町・中ノ橋通１丁目・肴町、南東辺は肴町・南大通２丁目、南辺は南大通２丁目に所在する。遺跡の範囲は東西1,150m、南北1,700m、堀と土塁を合わせた幅約20～25mで総延長約3,300m。市街化している現在の標高値は、西辺が126m前後、北辺が129～131m、北東辺が130m前後、東辺が127～128m、南東辺が124～126m、南辺が123～124mであり、北辺中央の花屋丁惣門付近が最も高く、そこから東西、及び北上川の流れる南へ緩やかに下っている。地質は、中津川・旧北上川沿いの砂礫段丘である。

2　歴史的環境

周辺の遺跡　盛岡城跡（国指定史跡、内曲輪）、盛岡城外曲輪跡、盛岡城遠曲輪跡は旧市街地区にあり、当該地区で令和４年度（2022）現在、埋蔵文化財包蔵地に登録されている遺跡は、永祥院経塚跡（材木町）、鍛冶町一里塚跡（紺屋町、市指定史跡）、聖寿禅寺南部家墓所（北山２丁目）、東禅寺南部家墓所（北山２丁目）、寺町窯跡（本町通２丁目）、舟橋跡（南大通３丁目・仙北１丁目、市指定史跡）と、基本的に全て近世のものである。ちなみに、盛岡城跡の発掘調査で中世の不来方城期の遺構や古代の遺構が発見されているほか、外曲輪跡や遠曲輪跡の発掘調査でも縄文時代や古代の遺構・遺物が断片的に発見されており、近世の城下町開発に伴い古い時代の遺跡が一掃されてしまったとみられる。地域区分としては東側の築川地区となる大慈寺町遺跡（大慈寺町）が盛岡城遠曲輪跡南東辺・南辺の東に隣接している。江戸時代に創建された５つの寺院がその大部分を占めるが、発掘調査により縄文時代から古代の集落遺跡であることがわかっている。

3　これまでの調査

遺跡の現状　江戸時代、盛岡城外曲輪及び遠曲輪の土塁と堀は、城と城下を守る重要な防衛線であったが、明治維新でその役目を終えると、ほとんどの土塁は切り崩され、堀が埋められて宅地化し、現在は道路や宅地の並びが当時の区画の名残を留める程度である。ただ、昭和30年代に外曲輪西辺北部に残されていた土塁本体を撮影したと考えられるモノクロ写真13枚が、岩手大学教育学部教授草間俊一氏（故人）の調査ノート（岩手県立博物館所蔵）の中にあり（盛岡市遺跡の学び館2014）、当時でも５m以上の高さがあったようである。中央通１丁目の現地には、その土塁の一部が保存され、「盛岡城中堀土塁跡」（吉丸竹軒書）の石碑が建立されている。

遺跡の調査　盛岡城外曲輪及び遠曲輪を埋蔵文化財包蔵地として登録し（当初は一括して盛岡城堀跡遺跡と呼称）、立会調査を開始したのが平成元年度（1989）であり、試掘・本調査の開始は平成10

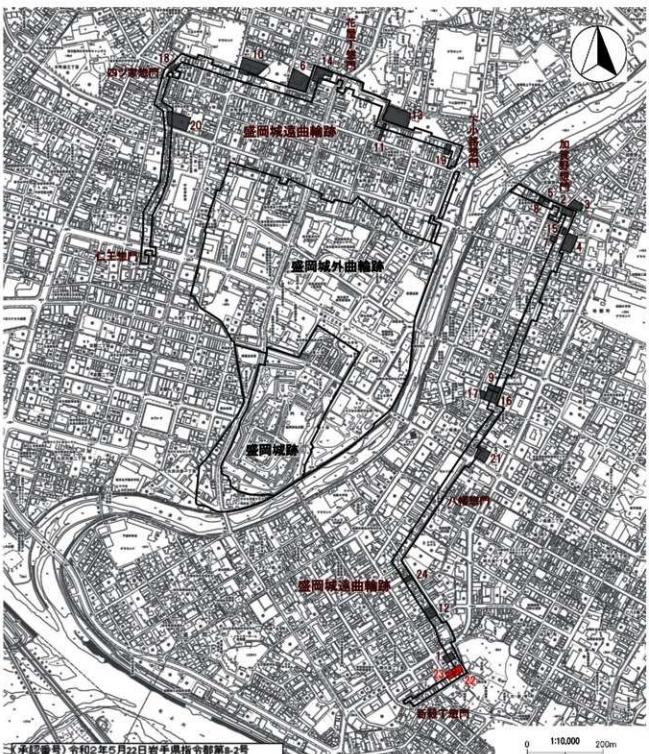
年度（1998）、外曲輪跡と遠曲輪跡を区分するようになったのは平成12年度（2000）以降である。基本的に、地盤改良を伴わない木造建築物については立会調査の対応とし、地盤改良や地形改変を伴う建築物、または基礎掘削の深い鉄骨・鉄筋コンクリート造建築物については試掘・本調査の対応としている。また、堀跡の本調査については、安全面を考慮して基本的に埋土の全掘は行わず、平面プランの確認及びサブトレンチによる部分的な深さの確認のみを行うこととしている。遠曲輪跡に係る発掘調査一覧は第１表のとおりであるが、本書刊行にあたり、平成26年度（2014）以前に報告している調査次数を修正している。

西辺の調査　遠曲輪跡西辺は、第18次（平成29年度）、第20次（令和２年度）の２地点で試掘調査が行われ、第18次調査では堀跡（SD100）が確認されている。

第１表　盛岡城遠曲輪跡発掘調査一覧表

次数	年度	調査方法	調査地点	所在地	面積(㎡)	調査期間	遺構・遺物	調査原因	発掘報告書
1	H10	本調査	南東辺	南大通2丁目367-2外	134	1998.12.28	近世堀（SD500）	共同住宅建築	未報告
2	H10	本調査	北東辺・東辺	上ノ橋町1-2	195	1998.9.17～ 1998.10.7	近世堀（SD300・400）	共同住宅建築	未報告
3	H11	試掘調査	北東辺	加賀野1丁目74-1外	55	1999.10.4	なし	共同住宅・個人住宅建築	未報告
4	H11	試掘調査	東辺	上ノ橋町5-101外	179	1999.10.15	なし	共同住宅建築	未報告
5	H11	試掘調査 (保存措置)	北東辺	上ノ橋町41-1	11	1999.11.4	近世堀（SD300）	店舗兼個人住宅建築	未報告
6	H11	試掘調査	北辺	本町通2丁目537-1外	80	2000.3.13	なし	マンション建築	未報告
7 (旧6)	H12	本調査	東辺	上ノ橋町2-20	77	2000.7.7～ 2000.7.12	近世土塁（SF400）	個人住宅建築	未報告
8 (旧7)	H13	試掘調査 (保存措置)	北東辺	上ノ橋町41-4	107	2001.9.3～ 2001.9.6	近世堀（SD300）	共同住宅建築	未報告
9 (旧8)	H13	試掘調査 (保存措置)	東辺	神明町17	46	2001.10.24	縄文時代後期遺物包含層、近世土塁（SF400）	共同住宅建築	未報告
10 (旧9)	H14	試掘調査	北辺	本町通2丁目546	160	2002.4.11	近世堀（SD200、建築範囲外）	共同住宅建築	未報告
11 (旧10)	H14	試掘調査	北辺	本町通1丁目15-27	30	2002.8.8	近世堀（SD200、柱状改良実施）	診療所兼個人住宅建築	未報告
12 (旧11)	H14	本調査 (一部保存措置)	南東辺	菊町314外	319	2003.3.17	近世堀（SD600）	マンション建築	未報告
13 (旧12)	H15	試掘調査	北辺	本町通1丁目549	128	2004.6.10	なし	店舗建築	未報告
14 (旧13)	H18	本調査	北辺	本町通2丁目6-24	1,400	2006.11.1～ 2006.12.15	近世堀（SD200）・粘土採掘跡・遺物包含層	寺院改築	H18報報(2008) ※13次で報告
15 (旧14)	H18	試掘調査	東辺	上ノ橋町4-10	27	2006.5.26	近世堀（SD400）	スポーツ練習場建築	未報告
16 (旧15)	H26	本調査	東辺	神明町1-1	503	2014.7.17～ 2014.8.31	古代竪穴建物1・土坑2・溝4・ピット、近世土塁（SF400）・堀（SD400）・暗渠排水溝1・排水溝1	共同住宅建築・駐車場造成	発掘報告書(2015) H26報報(2016) ※15次で報告
17	H27	試掘調査	東辺	神明町18の一部	36	2015.6.16	近世排水溝1	共同住宅建築	H27報報(2017) ※次数なしで報告
18	H29	試掘調査 (保存措置)	西辺	本町通2丁目425-5・6	18	2017.7.7	近世堀（SD100）	個人住宅建築	H29報報(2019)
19	H29	試掘調査 (保存措置)	北辺	本町通1丁目410-1の一部	61	2017.7.19	近世堀（SD200）	共同住宅建築	H29報報(2019)
20	R2	試掘調査	西辺	本町通2丁目463-3	180	2020.6.11～ 2020.6.12	なし	店舗建築	R2報報(2022)
21	R2	試掘調査	東辺	中ノ橋通1丁目13-6外	101	2020.11.16	なし	盛岡バスセンター整備	R2報報(2022)
22	R3	試掘・本調査	南東辺	南大通2丁目378-1、379-8、379-9	試 39 本 135	試 2021.4.28 本 2021.6.15～ 2021.6.29	古代竪穴建物1、近世堀（SD500）・石垣（SX600）、近代硬石建物1	会社事務所建築	本書
23	R3	試掘・本調査	南辺	南大通2丁目378-4、379-1	試 39 本 55	試 2021.6.8 本 2021.7.19～ 2021.8.3	古代竪穴建物1	寺院建築	本書
24	R4	試掘調査 (保存措置)	南東辺	菊町304-3	37	2022.5.20	近世堀（SD500）	個人住宅建築	R4報報(2024)予定

北辺の調査　遠曲輪跡北辺は、第６次（平成11年度）、第10・11次（平成14年度）、第13次（平成15年度）、第14次（平成18年度）、第19次（平成29年度）の６地点で試掘・本調査が行われ、第10・11・14・19次調査で堀跡（SD200）が確認されている。特に第14次調査（第13次調査として調査・報告）では、光照寺改築工事に伴う発掘調査で遠曲輪跡北辺中央が北に凸出する堀跡のコーナー部分が確認され、埋土中より盛岡南部氏の御紋、双鶴文の熨瓦や赤瓦、窯道具や陶器の未製品が多数出土した（盛岡市遺跡の学び館2010・2014）。



第２図　盛岡城遠曲輪跡全体図（1:10,000）

調査地点は、花屋丁惣門推定地の西側隣接地であり、天保４年（1833）に著された『盛岡砂子』には花屋丁惣門の近くに宝永年間（1704～）から盛岡藩の御用瓦窯「寺町窯」があったと記されていることから、出土遺物は寺町窯に関連するものと考えられる。

北東辺の調査　中津川を越えた遠曲輪跡北東辺は、第２次（平成10年度）、第３・５次（平成11年度）、第８次（平成13年度）の４地点で試掘・本調査が行われ、第５・８次調査で堀跡（SD300）が確認されている。本調査として実施した第２次調査では北東辺から東辺に曲がる堀跡のコーナー部分（SD300・400）を精査している。

東辺の調査　遠曲輪跡東辺は、第４次（平成11年度）、第７次（平成12年度）、第９次（平成13年度）、第15次（平成18年度）、第16次（平成26年度）、第17次（平成27年度）、第21次（令和２年度）の７地点で試掘・本調査が行われ、第15次調査で堀跡（SD400）が確認されている。また、第７・９・16次調査では土塁跡（SF400）が残存しており、特に第16次調査では三明院跡地に土塁跡や近世の暗渠排水溝跡が発見され、下層の古代の竪穴建物跡等の精査も行っている（第15次調査として調査・報告書刊行、盛岡市教育委員会2015）。

南東辺の調査　遠曲輪跡東辺南端が南東に屈曲する遠曲輪跡南東辺は、第１次（平成10年度）、第12次（平成14年度）、第24次（令和４年度）の３地点で試掘・本調査が行われ、堀跡（SD500）が確認されている。

南辺の調査　遠曲輪跡南東辺南端が西に屈曲する遠曲輪跡南辺は、その西端が新穀丁惣門であり、近世とされる石垣が現存しているのを見ることができる。ここから南辺東端まで、「寺の下」と呼ばれる道路沿いの建物裏（北側）に土塁石垣が残っていると伝えられていたが（盛岡の歴史を語る会1973）、本書報告の第22・23次調査まで、発掘調査が実施されることはなかった。

Ⅱ　調査の経過

１　第22次調査

発掘届　令和３年２月25日付け株式会社駒木葬祭より、盛岡市南大通二丁目２-６（地番378-1、379-8、379-9）での会社事務所建築に係る発掘届が提出される（盛岡城遠曲輪跡に該当）。同日付け２盛教遺第1-187号にて当該発掘届を岩手県教育委員会教育長宛て、試掘調査対応として進達。令和３年３月１日付け教生第63-586号にて岩手県教育委員会教育長より、当該地における工事について盛岡市教育委員会の試掘調査結果を基に盛岡市教育委員会と協議するよう通知があり、同日付け２盛教遺第240号にて届出者宛て、試掘調査を市費にて実施する旨、伝達文書が送付された。

試掘調査　既存建物の解体工事を待って令和３年４月28日に試掘調査（市費、第22次調査）を実施。その結果、敷地北半部は既存建物（鉄骨造３階建）の基礎で大きく攪乱されているものの、南半部に江戸時代と推定される堀跡・土塁跡の遺構が確認され、石垣が残存していることから、当該範囲について工事実施前に本調査（事業者経費負担）が必要である旨を回答。令和３年５月13日、６月１日、２日、５日の４回にわたり、本調査の実施期間・経費積算について事業者側と協議を重ね、盛岡市に発掘調査を依頼し、協定書と委託契約書を取り交わすことで合意。

協定・契約　令和３年６月９日付け、事業者の株式会社駒木葬祭と盛岡市教育委員会との間で２ヶ年にわたり野外調査・出土資料整理・報告書作成を行う協定を締結。これに基づき、同年６月10日付け、令和３年度分の契約を締結、野外調査を実施（試掘調査の次数を引き継ぎ第22次本調査とする）。令和４年４月15日付け令和４年度分の契約を締結、出土資料整理及び報告書作成を実施した。

2　第23次調査

発　掘　届　令和３年５月31日付け真言宗智山派湯殿山連正寺より、盛岡市南大通二丁目379-1、378-4（地番）での寺院建築に係る発掘届が提出される（第22次調査区に隣接、盛岡城遠曲輪跡に該当）。同日付け３盛教遺第1-21号にて当該発掘届を岩手県教育委員会教育長宛て、試掘調査対応として進達。令和３年６月11日付け教生第3-123号にて岩手県教育委員会教育長より、当該地における工事について盛岡市教育委員会の試掘調査結果を基に盛岡市教育委員会と協議するよう通知があり、同日付け３盛教遺第45号にて届出者宛て、試掘調査を市費にて実施する旨、伝達文書が送付された。

試 掘 調 査　岩手県教育委員会からの通知文書を待たず、令和３年６月８日に試掘調査（市費、第23次調査）を実施。その結果、敷地北半部は既存建物の基礎で大きく攪乱されているものの、南東部に江戸時代と推定される土塁跡の遺構が確認され、江戸時代の磁器破片と平安時代の土器破片が出土したことから、当該範囲について工事実施前に本調査（事業者経費負担）が必要である旨を回答。令和３年６月11日に事業者側と本調査の実施期間・経費積算について協議を行い、盛岡市に発掘調査を依頼し、協定書と委託契約書を取り交わすことで合意。

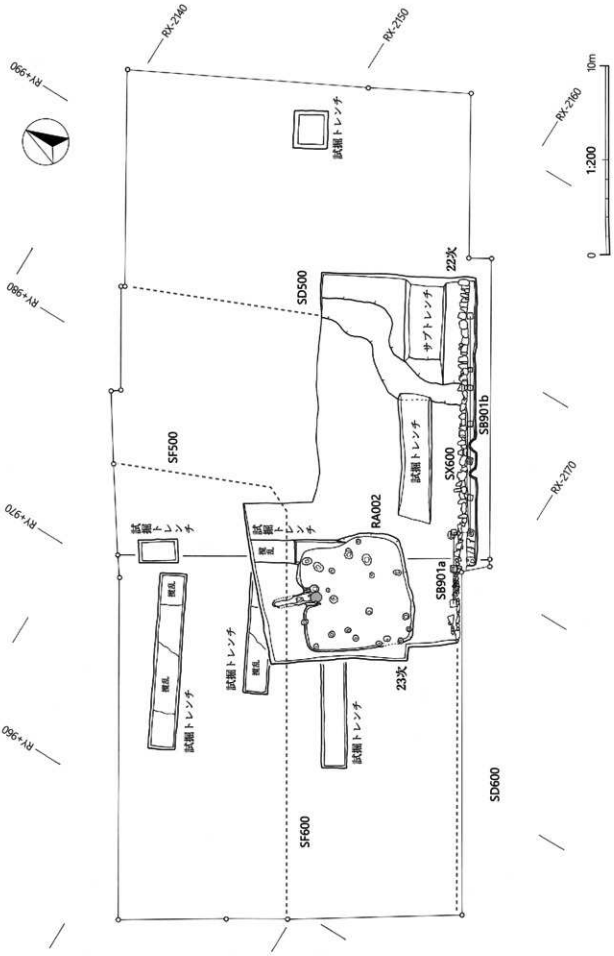
協定・契約　令和３年７月８日付け、事業者の宗教法人連正寺と盛岡市教育委員会との間で２ヶ年にわたり野外調査・出土資料整理・報告書作成を行う協定を締結。これに基づき、同年７月15日付け令和３年度分の契約を締結、野外調査を実施（試掘調査の次数を引き継ぎ第23次本調査とする）。令和４年４月15日付け令和４年度分の契約を締結、出土資料整理及び報告書作成を実施した。

Ⅲ　調査成果

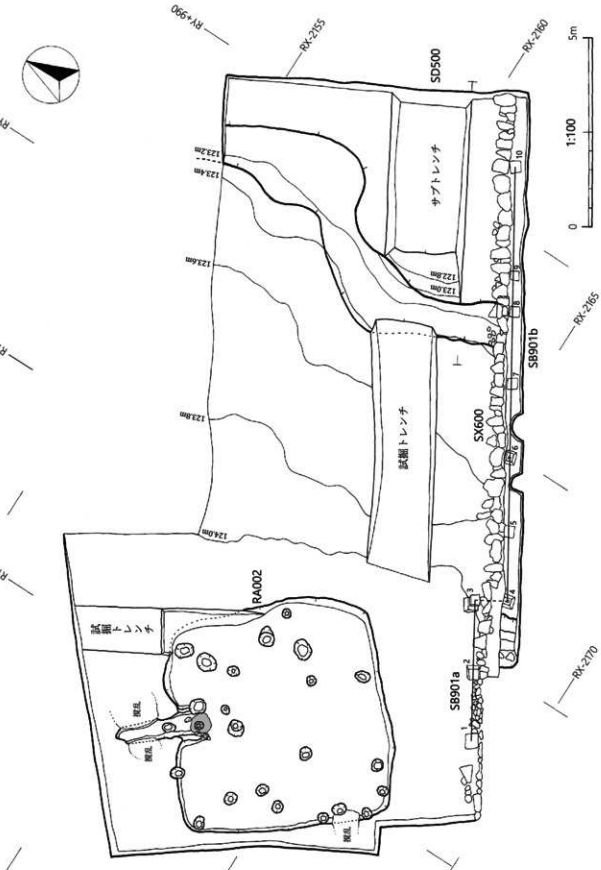
1　調査の概要

調　査　区　第22・23次調査区は、盛岡城遠曲輪跡（堀跡・土塁跡）の南東辺南端が南辺へ屈曲する箇所にあり、平成10年度実施の第１次調査区の南に位置する（第２図）。東側となる第22次調査の本調査面積は134.9㎡（敷地面積476㎡）、西側となる第23次調査の本調査面積は55.0㎡（敷地面積341㎡）。重機により表土を除去し、全体の東半部は砂礫層上面、西半部は褐色シルト層上面で遺構検出を行った。

遺構と遺物　第22・23次調査区で検出された遺構は、古代の竪穴建物跡１棟（RA002）、近世の堀跡（SD500）・土塁線（SF600）・石垣（SX600）、近代の礎石列（SB901）。出土した遺物は、縄文時代の土器、古代の土器・土製品・石製品・鉄製品、中世～近世以降の陶磁器・鉄製品・古銭、近現代ガラス瓶、自然遺物として獣骨（焼骨）・貝殻・炭化材などがある。



第３図　第22・23次調査全体図



第４図　SD500堀跡、SX600石垣、SB901礎石列

2　近世～近代の遺構と遺物

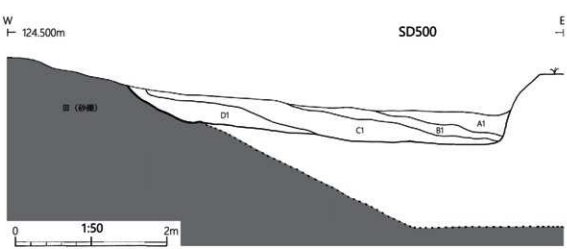
ＳＤ５００堀跡（第４・５図）

位置・規模　調査区東部を北西から南東に走る遠曲輪堀跡の西上端を確認した。砂礫層が検出面であり、調査区の南を走ると想定される南辺堀跡SD600への屈曲部分が鉤形（クランク状）となっていた。調査区内での規模は、上端幅が2.5～6.5m以上、東上端を市道と敷地の境界線と想定すると、12.5～16.5mを測る。サブトレンチで、敷地の東側の地表面（市道舗装面とほぼ同じレベル）下1.0mまで掘り下げ、土層観察を行ったが、堀跡の底面は地表面下約２mにあることを試掘トレンチにより確認している。

埋　　土　埋土はＡ１層、Ｂ１層、Ｃ１層、Ｄ１層が確認された。上部のＡ１・Ｂ１層は自然堆積、下部のＣ１・Ｄ１層は人為堆積と考えられる。いずれの層も礫が多く混じるが、特にＢ１層は砂礫を主体としており、基盤の砂礫層の崩落土とみられる。Ｃ１層には炭化物が混じり、Ｄ１層からは牡蠣とみられる貝殻の破片が出土している。

ＳＦ６００土塁線・ＳＸ６００石垣（第４・６・７図）

位置・規模　調査区内を走るSF600遠曲輪土塁線上に土塁本体の積み土は検出されなかったが、南辺堀跡SD600との間にSX600石垣が残存していた。調査区南端に確認された総延長は19.5m。うち、立面が露出している部分は東端から15.5m。ただし、東端から5.0mは最下段である根石のみを検出した。石垣直下に幅0.5mのサブトレンチを設定し、根石下端まで掘り下げたところ、砂礫層またはSD500堀跡埋土の上にのる花崗岩の礎石列（後述）を検出し、サブトレンチ埋土には礫とともに焼土と炭化物が多量に混じっていた。根石下端から石垣天端までの高さは、西端の最も高い所で1.5m、東端で0.7mを測る。



遺構名	層名	主要土		含有土				硬軟	密度	その他
		土色(JIS)	土性(略号)	土色(JIS)	土性(略号)	状態	%			
SD500堀跡	A1	10YR2/2黒褐色	SiCシルト質埋土	10YR4/4褐色	SiCシルト質埋土	粒	10	硬	密	礫多く混じる 自然堆積
	B1	－	砂礫	10YR4/6褐色	SiCシルト質埋土	粒	40	中～硬	中～密	自然堆積
	C1	10YR2/3黒褐色	SiCシルト質埋土	10YR4/6褐色	SiCシルト質埋土	粒～塊	30	硬	密	礫多く混じる、炭化物混じる、人為堆積
	D1	10YR4/6褐色	SiCシルト質埋土	10YR2/3黒褐色	SiCシルト質埋土	粒～塊	40	硬	密	礫多く混じる 人為堆積

第５図　SD500堀跡サブトレンチ断面

積み方・石材　積み方は谷積み（落し積み）となっているが、西側約３ｍの範囲は石材が水平に積み上げられているだけとなっており、後世に積み直しされている。石材は、径20～50㎝の自然石と割石であり、矢穴が12石に確認された。立面を写真図化した約300石のうち、95石が花崗岩であり、中には不鮮明ながら文字や線が刻まれた石碑の転用が２石確認できた。中央の一部石材には強く火を受けた痕跡やススの付着が見られた。

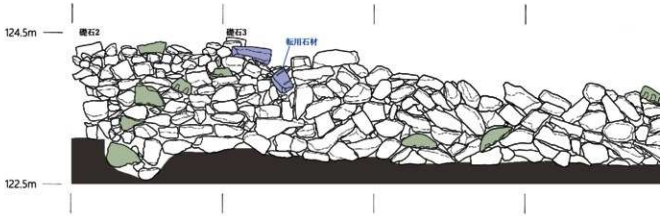
裏込・盛土　基本的に石材の背面には裏込の栗石や盛土はなく、砂礫層の切土に直接石材を積み上げている。ただし、断面を図化した西端部分は、上端で幅約２ｍ、45度の角度で根石上部まで締まりのない盛土があり、積み直しが確認された。

ＳＢ９０１ａ・ｂ礎石列（第４図）

位　　置　調査区南西端、SX600石垣の天端上に花崗岩の礎石３基（礎石１～３）で構成されるSB901ａ礎石列と、調査区南辺のSX600石垣下端根石検出サブトレンチ内に花崗岩の礎石７基（礎石４～10）で構成されるSB901ｂ礎石列を確認した。

構造・規模　SB901ａは、２間で総長3.82m（12尺６寸【１尺＝0.303m】）、柱間寸法は1.91m（６尺３寸）等間。SB901ｂは、６間で総長11.45m（37尺８寸）、柱間寸法は西から1.91m（６尺３寸）＋1.91m（６尺３寸）＋1.91m（６尺３寸）＋1.91m（６尺３寸）＋0.95m（３尺１寸５分）＋2.86m（９尺４寸５分）と想定される。SB901ａ東端の礎石３とSB901ｂ西端の礎石４との平面距離（柱間寸法）は0.95m（３尺１寸５分）のようである。

礎　　石　SB901ａの礎石１～３は、一辺0.25～0.4mの割石の立方体。礎石３は、やや大きめの礎石を下にして、矢穴のあるやや小ぶりな礎石がその上に据えられ、高さ調整がされているようである。また、礎石２は上面に「馬」と朱書きされていた。SB901ｂの礎石４・６は、平面の一辺が0.33mの装飾的な礎盤が転用されており、上面に正方形のホゾ穴がある。その他の礎石は、一辺0.25～0.3mの立方体の割石であり、礎石９には割れが入っていた。SB901ａ・ｂは１棟の礎石建物の一部と考えられるが、前述の石垣の所見ではSB901ａの下の石垣は積み直しがされている。



第６図　SX600石垣立面

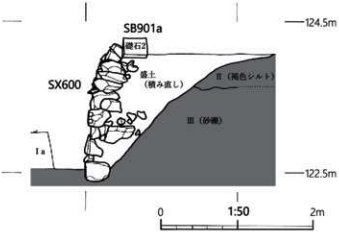
出土遺物

堀跡サブトレンチ埋土、石垣天端の検出面、石材の間、根石検出サブトレンチから、中近世陶磁器、古銭、近現代ガラス瓶などが出土している（写真第４図版）。

陶磁器　盛岡城遠曲輪築城以前、中世の輸入青磁碗高台部（中国または朝鮮産、15～16世紀）、染付角皿底部（中国産、16～17世紀）破片が、RA002竪穴建物跡の表土・攪乱部分から出土している。築城後となる近世磁器の肥前染付は、徳利（17～18世紀）、碗（コンニャク印判、18世紀代）、湯呑・蓋（18～19世紀）、輪花皿（蛇の目高台、18世紀後半～19世紀）の破片が出土している。瀬戸・美濃染付は19世紀以降の碗、湯呑、蓋の破片が出土し、焼継の修復痕もみられる。また、幕末に盛岡で開窯された山藤焼（茶畑一丁目所在）の染付碗・輪花皿・湯呑の破片、花古焼（東新庄二丁目所在）の碗の破片が出土している。

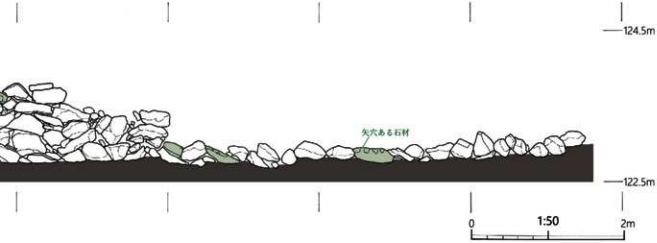
古銭　寛永通宝が３点出土しており、文字が判読できたものは新寛永（1668年以降）であった。

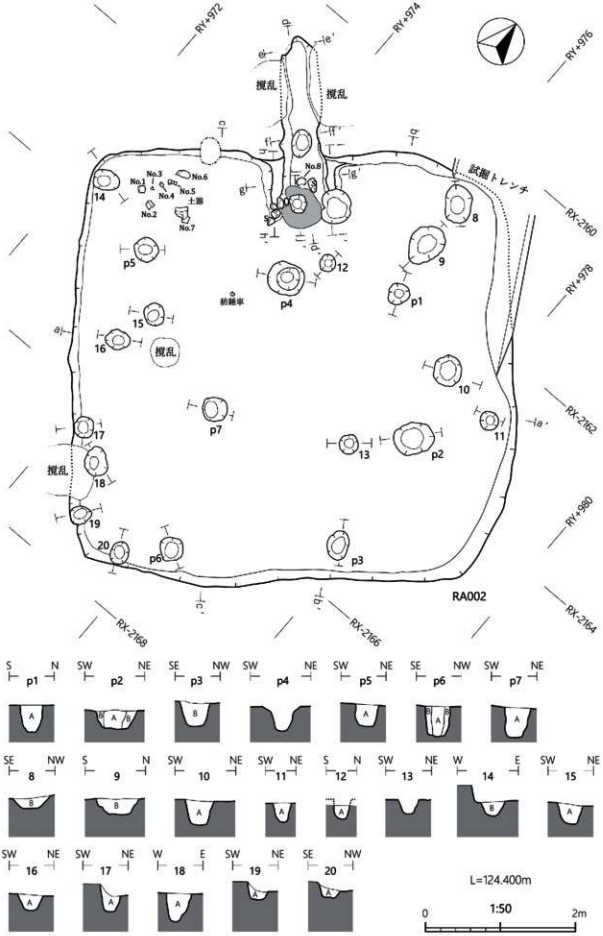
ガラス瓶　大正～昭和初期のサイダー瓶、一般用薬瓶、目薬瓶、化粧クリーム瓶、代用陶磁器、昭和20年代の舐め菓子瓶が出土しているが、詳細は別稿にて報告を行う。



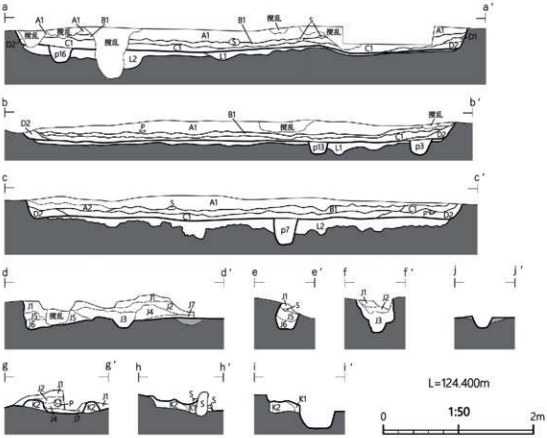
第７図　SX600石垣断面

近現代ガラス瓶





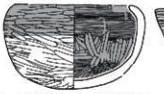
第８図　RA002竪穴建物跡（1）



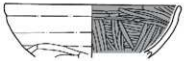
遺構名	層名	主要土		含有土				硬軟	密度	その他
		土色(JIS)	土性(埴号)	土色(JIS)	土性(埴号)	状態	%			
RA002 竪穴建物跡	A1	10YR2/2黒褐色	SiLシルト質壌土	10YR3/3暗褐色	SiLシルト質壌土	小粒～中粒	2	硬	密	焼土粒・砂粒混じる、径0.5～5cm微少量混じる
	A2	10YR2/1黒色	SiLシルト質壌土	10YR3/3暗褐色	SiLシルト質壌土	小粒	2	中～硬	中～密	砂粒混じる
	B1	10YR1.7/1黒色	SiCLシルト質壌土	10YR2/2黒褐色	SiLシルト質壌土	小粒～小塊	10	中～硬	中～密	径1～10cm微少量混じる
	C1	10YR2/1黒色	SiCLシルト質壌土	10YR2/2黒褐色	SiLシルト質壌土	小粒～大塊	15	中～硬	中～密	炭化物粒少量混じる
	D1	10YR2/1黒色	SiCLシルト質壌土	10YR3/3暗褐色	SiLシルト質壌土	小粒～大塊	20	硬	密	壁崩壊土混じる
	D2	10YR2/1黒色	SiCLシルト質壌土	10YR3/3暗褐色	SiLシルト質壌土	小粒～中塊	15	中～硬	中～密	壁崩壊土混じる
	J1	―	―							カマド崩壊土
	J2	10YR2/2黒褐色	SiCLシルト質壌土	10YR4/4褐色	SiLシルト質壌土	小粒	5	中～硬	中	焼土粒・炭化物粒・ウンモ混じる
	J3	10YR2/1黒色	SiCLシルト質壌土	10YR2/2黒褐色	SiCLシルト質壌土	小塊	5	中	中	炭化物粒が多量に混じる
				10YR4/4褐色	SiLシルト質壌土	小粒	2			
	J4	10YR2/3黒褐色	SiCLシルト質壌土	10YR2/1黒色	SiCLシルト質壌土	中塊	10	中～硬	中	焼土・ウンモ多量に混じる
				10YR5/4にぶい黄褐色	SiCシルト質壌土	大塊	10			
	J5	10YR3/2黒褐色	SiCLシルト質壌土	10YR2/1黒色	SiCLシルト質壌土	小塊～大塊	15	中	中	焼土粒多量、炭化物・径1cm微少量混じる
	J6	10YR2/1黒色	SiCLシルト質壌土	10YR4/4褐色	SiLシルト質壌土	小粒	2	軟～中	中	径1～2cm微少量混じる
	J7	―	―							カマド崩壊土
	K1	10YR3/3暗褐色	SiCLシルト質壌土	10YR2/2黒褐色	SiCLシルト質壌土	小塊～大塊	5	中～硬	中～密	カマド袖構築土
				5YR4/6赤褐色	焼土	粒～小塊	5			
	K2	10YR4/4褐色	SiLシルト質壌土	10YR2/2黒褐色	SiCLシルト質壌土	粉～中塊	15	硬	中～密	径0.5～2cm多く混じる
	L1	10YR2/2黒褐色	SiCLシルト質壌土	10YR4/4褐色	SiLシルト質壌土	小粒～大塊	10	中～硬	中	床構築土、径0.5～2cm多く混じる
	L2	10YR4/4褐色	SiLシルト質壌土	10YR2/1黒色	SiCLシルト質壌土	小粒～大塊	30	中	中	

第９図　RA002竪穴建物跡（2）

1 土師器坏(カマド内J4層、土器No.8)

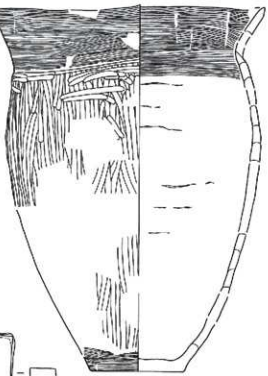


2 土師器坏(c-c'ベルトB1層)



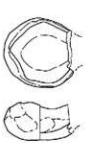
3 土師器坏(SW区B1層)

4 あかやき土器坏(SW区B1層)

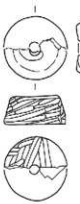


5 土師器甕
(C1層、土器No.7)

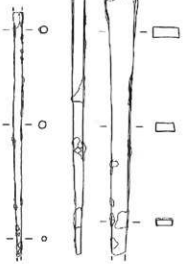
6 須恵器壺(NE区B1層)



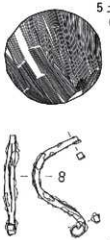
7 (D2層)



8 (NE区,B1層)



9 (ｐ1埋土)　10 (SE区中層)



11 (ｐ7埋土)

12 (西半部埋土)

0　1:3　10cm

			形態		出土		寸法(cm)※欠損部・復元のみ					底部切離等	器面調整		胎土等・特徴
図	番号	台帳No.	区分	種類	平面位置	層位	器高	口径	体径	底径	坏口径/底径 脚口径/体径	口径/器高		内面	内面	
10	1	2	土師器	坏	カマド内、土器No.8	J4	6.6	11.6	—	—	／	1.8	非ロクロ、平底風丸底	ヘラミガキ＋口縁部黒色処理	ヘラミガキ＋黒色処理	口縁部強くナデ、明状、ウンモ混じる
10	2	49	土師器	坏	C-Cベルト	B1	6.6	9.6	—	—	／	1.5	非ロクロ、丸底	ヘラミガキ＋口縁部黒色処理	ヘラナデ＋ヘラミガキ＋黒色処理	口縁部強くナデ、明状
10	3	51	土師器	坏	SW区	B1	—	14.0	—	—	／	／	ロクロ、欠損不明	体部下端ケズリ	ヘラミガキ＋黒色処理	胎土に細かいウンモを混じる
10	4	50	あかやき土器	坏	SW区	B1	5.4	13.6	—	6.2	2.2	2.6	回転糸切無調整	ロクロ目	ロクロ目	胎土の一部濃元焼成、全体に密多孔
10	5	1	土師器	甕	土器No.7	C1	18.9	21.4	20.2	7.4	1.1	1.1	ヘラナデ	口縁部ヘラナデ、体部ヘラミガキ	口縁部ヘラナデ	口縁部内面、外面一部に二次状炭化物と付着物、内面一部にコゲ状炭化物、体部に細かいウンモ混じる
10	6	82	須恵器	壺	NE区	B1	—	—	11.6	—	／	／	欠損不明	ロクロ目、自然釉	ロクロ目	小型壺
図	番号	台帳No.	区分	種類	平面位置	層位	寸法(cm)・特徴									
10	7	77	土製品	ミニチュア	—	D2	全長5.6以上（欠損）、幅5.5、高さ3.0、ユビナデ調整、欠損しているが把手付（スプーン形）と推定									
10	8	3	土製品	紡錘車	NE区	B1	径5.0（推定）、厚さ2.2、ヘラミガキ調整、半分欠損									
10	9	1	鉄製品	棒状	p1	埋土	長さ19.7以上（両端欠損）、径0.35～0.6、断面は円形に近い方形									
10	10	16	鉄製品	鉄鏃状	SE区	中層	長さ20.7以上（先端欠損）、幅2.7～1.1、厚さ1.1～0.4、断面長方形									
10	11	3	鉄製品	金具状	p7	埋土	長さ7.9以上（欠損）、幅3.7、厚さ0.4～1.0、断面は円形に近い方形									
10	12	19	鉄製品	金具状	西半部	埋土	長さ3.2以上（欠損）、幅1.2、厚さ0.8、断面長方形									

第10図　RA002出土土器・土製品・鉄製品

3　古代の遺構と遺物

ＲＡ００２竪穴建物跡（第８・９図）

位　　置　調査区北西部。　**重複関係**　なし。

平 面 形　不整方形。　**規　　模**　北西－南東5.78m、北東－南西5.85m、深さ0.25m。

カマド方向　煙道：N45.5°Ｗ、北西カマド（竪穴建物中心線：N40.5°Ｗ）、長い煙道（1.6m、底面が煙道の途中から煙出しに向かって下がっていく）。

カ マ ド　両袖残存、左袖に芯材の礫あり、右袖石・カマド支脚石の抜き取り穴あり。

埋　　土　Ａ１・２層、Ｂ１層、Ｃ１層、Ｄ１・２層、Ｊ１～７層（カマド崩壊土）、Ｋ１・２層（カマド構築土）、Ｌ１・２層（床構築土）、局所的に埋土が非常に硬化していた。

床　　面　床構築土あり、顕著な硬化面はない。

柱　　穴（第２表）　主柱穴７口（ｐ１～７）、ピット13口（８～20）。想定される上屋構造は、ｐ１－ｐ４－ｐ５とｐ３－ｐ６が桁行、ｐ１－ｐ２－ｐ３とｐ５－ｐ６が梁行で上に叉首を組んで棟木をのせ、ｐ２とｐ７が棟持柱になっていたと考えられる。恐らく、ｐ２－ｐ３間を出入口とするため変則的な柱配置になったとみられ、またｐ４はカマドの上部空間を確保するための桁柱と推定される。

出土遺物（第10図）　古代の土器では、非ロクロ内黒で口縁部が内湾する塊形の土師器坏（１・２）、ロクロ内黒の土師器坏（3）、土師器甕（5）、あかやき土器坏（4）、あかやき土器甕の破片、須恵器壺（6）、須恵器坏・甕の破片が出土している。土製品では、把手は欠損しているがスプーン形と考えられるミニチュア土器（7）、紡錘車（8）が、鉄製品では、棒状(9)、鉄鋌状(10)、金具状（11・12）のものが出土している。このほか、砥石として使用した可能性のある火山岩の軽石が床構築土内より出土している。また自然遺物では、カマド・煙道埋土下部より炭化材や白く焼けた獣骨破片が出土している。なお、床構築土から埋土上層まで一定数の地紋のみの縄文土器破片が混入しており、木葉痕のある深鉢底部もみられる。

時　　期　９世紀前葉。

第２表　RA002 主柱穴・ピット観察表

主柱穴	p1	p2	p3	p4	p5	p6	p7
径(m)	0.28	0.42-0.54	0.28-0.38	0.42	0.32	0.30	0.30
深さ(m)	0.35	0.24	0.30	0.32	0.28	0.40	0.40
平面形	不整円形	不整楕円形	不整楕円形	不整円形	不整円形	不整円形	不整円形
柱痕跡	×	あり	×	×	×	あり	×
ピット	8	9	10	11	12	13	14
径(m)	0.34-0.50	0.42-0.56	0.36	0.24	0.20	0.25	0.26
深さ(m)	0.14	0.20	0.32	0.25	(0.26)	0.18	0.16
平面形	不整楕円形	不整楕円形	不整円形	不整円形	不整円形	不整円形	不整円形
柱痕跡	×	×	×	×	×	×	×
ピット	15	16	17	18	19	20	
径(m)	0.26	0.28	0.26	0.28-0.36	0.26	0.26	
深さ(m)	0.25	0.20	0.20	0.35	0.10	0.10	
平面形	不整円形	不整円形	不整円形	不整楕円形	不整円形	不整円形	
柱痕跡	×	×	×	×	×	×	

Ⅳ　総括

1　調査のまとめ

令和３年度に実施された盛岡城遠曲輪跡第22・23次調査により、前章に記載した内容の調査成果を得ることができた。以下、調査のまとめを行い、総括とする。

〔近世～近代〕

堀　　跡　調査区東部に、近世の盛岡城遠曲輪南東辺堀跡（SD500）が検出された。南辺堀跡（SD600）へ屈曲する部分が鉤形（クランク状）に曲がって掘られていた時期があることが確認された。推定される堀幅は12.5～16.5m、深さは東に隣接する市道舗装面レベルの下約２m であった。サブトレンチによる土層観察から、この鉤形はある時期に人為的に埋められ、一定期間放置されたのち、その上に後述の石垣が築造されている。

土塁・石垣　調査区内の大部分は、近世の盛岡城遠曲輪南辺土塁線（SF600）が走るが本体の積み土は検出されず、南辺堀跡（SD600）との間に石垣（SX600）が残存していた。確認された長さは延長19.5m（立面の露出は15.5m）、高さは根石下端から石垣天端まで最大1.5m を測る。径20～50cmの自然石または割石を石材とし、花崗岩の割石の一部に矢穴が確認された。積み方は谷積みとなっていた。石垣の年代を考察すると、谷積みであることから古くても幕末期（19世紀中頃）。石垣に残る焼け焦げやサブトレンチに残る多量の焼土と炭化物を明治17年の大火によるものとすれば、上限は1884年となる。なお、土塁位置が現地の土地境界杭に反映していると想定すれば、当該地の土塁基底幅は約９m（60尺）のようである。

礎 石 列　SX600石垣の天端上に花崗岩の礎石３基で構成されるSB901ａ礎石列、SX600石垣下端根石検出サブトレンチ内に花崗岩の礎石７基で構成されるSB901ｂ礎石列が検出された。当該地の真言宗智山派湯殿山連正寺については、山形県湯殿山注連寺の即身仏で有名な鉄門海が文政３年（1820）に来盛、布教したことを開山とする説もあるが、鶯岡市南岳寺で即身仏となった鉄竜海が明治12年（1879）に創立したことを示す公文書が近年発見されている（中村・鹿野2022）。明治17年（1884）の大火で全焼したため詳細な縁起は不明であるが、明治34年(1901）に再建され、昭和40年代に東側の一部を改築、その建物が調査直前に解体がされたという。昭和40年代の改築の際に作成されたと考えられる明治34年建築の本堂・庫裏平面図の写しを寺院より提供いただき、比較したところ、南側柱筋について柱間寸法の並びがほぼ一致していることが確認できた。このことから、SB901a・ｂ礎石列は明治12年創建時の連正寺の礎石建物跡の一部であり、明治34年再建建物は、明治12年創建建物の柱間寸法を継承して設計・建築がなされたと推察される。

〔古　代〕

竪穴建物跡　調査区北西部で精査した古代の竪穴建物RA002は、平面が不整方形の一辺5.78～5.85mの大型住居（一辺５m以上）である。北西カマドで煙道が長く、床面には主柱穴が７口ある。

出 土 遺 物　非ロクロとロクロの内黒土師器坏と、底径の大きいあかやき土器坏（断面が還元焼成化した生焼け須恵器）、体部ヘラミガキ調整の土師器甕、須恵器小型壺が埋土下部より出土している。口縁が内湾する埦形の非ロクロ土師器坏２点が特徴的で、当該調査区の南西方向、北上川

対岸の盛南地区・都南地区の出土例（津嶋2013）から、年代は9世紀前葉であろう。また、鉄製品4点が比較的良好な状態で出土している点も特徴的である。

自然科学分析　RA002カマド煙道の埋土下部、J層付近から炭化材（52×15×12mm）が出土しており、放射性炭素年代測定を行った。結果は、2σ（95.4%）の値がcalAD1304～1405と、暦年代で14世紀頃（中世）を示した。また、樹種同定分析では、カエデ属（*Acer*）との結果が得られた。カエデ属は渓谷沿いや人里と山地の林縁などの明るい林地に生育し、全体的に湿ったところを好む傾向にある。遺跡周辺には普通に生育する木材であるため燃料材等として容易に入手できたと考えられる。

測定された年代を解釈するにあたり、改めて出土遺物を見直すと、輸入青磁碗高台部（中国または朝鮮産、15～16世紀）は、RA002表土層から出土している。また、埋土中層から出土した「鉄鋌状」とした鉄製品は、本当に鍛冶用鋼素材「鉄鋌」であれば、現在のところその出土例は中世に限られている（天本2016）。青森県浪岡城跡から出土した34本の「鉄鋌」が著名であり（15～16世紀代）、滋賀県斗西遺跡の出土例から「鉄鋌」の利用が遡れるのは12世紀までである。以上から、現地での土層観察では読み取れなかったもののRA002の埋没過程の途中で、中世に何らかの利用があり、埋土（炭化材）の汚染、輸入青磁碗や「鉄鋌」の遺棄または廃棄があったものと解釈したい。

集落の広がり　当該地東方の大慈寺町遺跡では、遺跡北部に位置する曹洞宗久昌寺増築に伴う本調査面積1,025㎡の第1次発掘調査で、平安時代の竪穴建物跡8棟が精査されており（平成7年度）、古代集落の存在が確認されている。RA002竪穴建物跡の位置からは約160m北東に離れているが、当時の古代集落が両者を含む広い範囲に展開していたとすれば、その後の近世の城下町建設や寺院群建設に伴い、本来の地形が大きく損なわれたものと考えられる。

【引用・参考文献】

天本昌希 2016「山形県内の製鉄遺構の集成と再検討」『研究紀要第8号』公益財団法人山形県埋蔵文化財センター

津嶋知弘 2013「古代「斯波（志波）」郡北部の土器群変遷（その1）－雫石川南岸所在遺跡の盛岡市教育委員会発掘調査資料を中心に－」盛岡市遺跡の学び館学芸レポートVol.2（盛岡市ウェブサイト）

中村安宏・鹿野朱里 2022「鉄門海の思想－『亀鏡志』の分析を中心に－」『アルテス・リベラレス』第110号（岩手大学人文社会科学部紀要）

盛岡市遺跡の学び館 2010『第9回企画展「もりおかで焼かれた"やきもの"－セトモノから煉瓦まで－」図録』

盛岡市遺跡の学び館 2014『開館10周年特別展「もりおか発掘物語」図録』

盛岡市教育委員会 2015『盛岡城遠曲輪跡 第15次発掘調査報告書』

盛岡市仏教会 1995『盛岡の寺院』

盛岡の歴史を語る会 1973『もりおか物語（壱）－惣門かいわい－』

盛岡城遺曲輪跡第22・23次調査区遠景（北東から）

SD500堀跡（北西から）

SX600石垣・SB901礎石列（北東から）

盛岡城遺曲輪跡第22・23次調査区全景（東から）

SX600石垣断面（北東から）

SX600石垣詳細

SX600石垣の火災痕跡

SX600石垣の転用石材（石碑）

SX600石垣調査風景

SX600石垣の矢穴のある石材①

SX600石垣の矢穴のある石材②

SX600石垣の矢穴のある石材③

SB901a礎石1

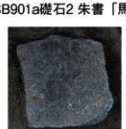
SB901a礎石2 朱書「馬」

SB901a礎石3 矢穴

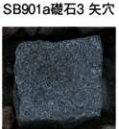
SB901b礎石4 礎盤

SB901b礎石5

SB901b礎石6 礎盤



SB901b礎石7



SB901b礎石8

SB901b礎石9

SB901b礎石10

RA002竪穴建物跡（南東から）〔左：西半部（23次）、右：東半部（22次）〕

RA002カマド・煙道

RA002土師器甕出土状況

RA002非ロクロ土師器坏出土状況（カマド）

RA002鉄鏃状鉄製品出土状況

非ロクロ土師器坏-RA002

あかやき土器坏-RA002
（断面が還元焼成化）

土師器甕-RA002

ミニチュア土器・土製紡錘車・鉄製品-RA002

中世輸入陶磁器

1 青磁碗（中国または朝鮮）
15～16世紀
2 染付角皿（中国）
16～17世紀

底部

近世国産磁器染付　17～19世紀

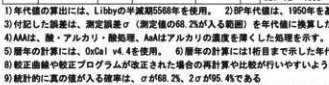
3～7 肥前　8～13 瀬戸・美濃　14・15 山陳　17 花古（16は近代）

盛岡城遠曲輪跡第22・23次発掘調査の自然科学分析（抜粋）　　パリノ・サーヴェイ株式会社

分析試料 No.1：炭化材(RA002カマド煙道J4層付近出土)

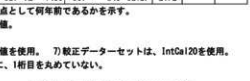
No.	性状	方法	補正年代（暦年較正用）BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正年代								Code No.	
						年代値						確率 %		
1	炭化材 カエデ属	AAA (1M)	600±20 (598±22)	-30.95 ±0.35	σ	cal AD 1320 - cal AD 1359	630 - 591 calBP	56.7	YU-16191	pal-14108
						cal AD 1389 - cal AD 1398	561 - 552 calBP	11.6		
					2σ	cal AD 1304 - cal AD 1366	646 - 584 calBP	74.3		
						cal AD 1383 - cal AD 1405	567 - 545 calBP	21.2		

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。　2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4)AAAは、酸・アルカリ・酸処理、AaAはアルカリの濃度を薄くした処理を示す。
5)暦年の計算には、OxCal v4.4を使用。　6)暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。　7)較正データーセットは、IntCal20を使用。
8)較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
9)統計的に真の値が入る確率は、σが68.2%、2σが95.4%である



1.カエデ属(No.1)

a:木口　b:柾目　c:板目
スケールは100μm



報 告 書 抄 録

ふりがな	もりおかじょうとおくるわあと -だい22・23じちょうさ かいしゃじむしょおよびじいんけんせつにともなうきんきゅうはっくつちょうさほうこくしょ-
書名	盛岡城遠曲輪跡 －第22・23次調査 会社事務所建設及び寺院建設に伴う緊急発掘調査報告書－
副書名	
編著者名	津嶋知弘・鈴木俊輝・佐々木あゆみ
編集機関	盛岡市遺跡の学び館（刊行：盛岡市教育委員会・株式会社駒木葬祭・宗教法人連正寺）
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1 電話 019-635-6600
発行年月日	2022年12月15日

ふりがな 所収遺跡名（略号）	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 （世界測地系）	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
もりおかじょうとおくるわあと 盛岡城遠曲輪跡 （MMT）	いわてけんもりおかし みなみおおどおり 岩手県盛岡市 南大通 2ちょうめ 二丁目 378-1、379-8、379-9	03201	LE06-2389	39° 41′ 41.0″	141° 9′ 22.0″	22次：2021.6.15 -2021.6.29	135	会社事務所建設
	いわてけんもりおかし みなみおおどおり 岩手県盛岡市南大通 2ちょうめ 二丁目 378-4、379-1	03201	LE06-2389	39° 41′ 40.5″	141° 9′ 21.5″	23次：2021.7.19 -2021.8.3	55	寺院建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
盛岡城遠曲輪跡 第22・23次調査	城郭	縄文時代		縄文土器	
		古代	竪穴建物跡 1	土師器、須恵器、あかやき土器、土製品、石製品、鉄製品	
		中世		輸入陶磁器	
		近世	堀跡、土塁跡、石垣	陶磁器、古銭、鉄製品	
		近代	礎石列	陶磁器、古銭、鉄製品、ガラス瓶	
要約	江戸時代を通じて盛岡藩主であった南部氏は、慶長２年（1597）から居城として総石垣の盛岡城の築城を開始し、その北側に重臣屋敷の並ぶ外曲輪を配して堀で囲んだ。そのさらに外側に堀と土塁を廻らせたのが遠曲輪で、東西約1.2km・南北約1.5kmにわたる長大な遺跡である。本書掲載の第22・23次調査区は遺跡の南東部に位置し、遠曲輪南東辺が南辺に屈曲する箇所にあたり、城郭期である近世の堀跡と土塁下部の石垣を確認した。石垣の石材には矢穴のある花崗岩の割石が一部用いられ、谷積み（落し積み）となっており、火災痕跡がみられた。また、土塁線下に古代の大型竪穴建物跡を確認し、当該箇所周辺に古代の集落が展開していたことを示している。				

盛 岡 城 遠 曲 輪 跡

－第 22・23 次調査　会社事務所建設・寺院建設に伴う緊急発掘調査報告書－

令和 4 年 12 月 15 日

編集　盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13-1
電話 019-635-6600　FAX 019-635-6605
E-mail iseki@city.morioka.iwate.jp
URL https://www.city.morioka.iwate.jp/
遺跡の学び館　検索

発行　盛岡市教育委員会・株式会社駒木葬祭・宗教法人連正寺
印刷　株式会社富士屋印刷所
〒020-0841 岩手県盛岡市羽場13地割30番地10

積み方・石材　積み方は谷積み（落し積み）となっているが、西側約３ｍの範囲は石材が水平に積み上げられているだけとなっており、後世に積み直しされている。石材は、径20～50㎝の自然石と割石であり、矢穴が12石に確認された。立面を写真図化した約300石のうち、95石が花崗岩であり、中には不鮮明ながら文字や線が刻まれた石碑の転用が２石確認できた。中央の一部石材には強く火を受けた痕跡やススの付着が見られた。

裏込・盛土　基本的に石材の背面には裏込の栗石や盛土はなく、砂礫層の切土に直接石材を積み上げている。ただし、断面を図化した西端部分は、上端で幅約２ｍ、45度の角度で根石上部まで締まりのない盛土があり、積み直しが確認された。

ＳＢ９０１ａ・ｂ礎石列（第４図）

位　　置　調査区南西端、SX600石垣の天端上に花崗岩の礎石３基（礎石１～３）で構成されるSB901ａ礎石列と、調査区南辺のSX600石垣下端根石検出サブトレンチ内に花崗岩の礎石７基（礎石４～10）で構成されるSB901ｂ礎石列を確認した。

構造・規模　SB901ａは、２間で総長3.82ｍ（12尺６寸【１尺＝0.303ｍ】）、柱間寸法は1.91ｍ（６尺３寸）等間。SB901ｂは、６間で総長11.45ｍ（37尺８寸）、柱間寸法は西から1.91ｍ（６尺３寸）＋1.91ｍ（６尺３寸）＋1.91ｍ（６尺３寸）＋1.91ｍ（６尺３寸）＋0.95ｍ（３尺１寸５分）＋2.86ｍ（９尺４寸５分）と想定される。SB901ａ東端の礎石３とSB901ｂ西端の礎石４との平面距離（柱間寸法）は0.95ｍ（３尺１寸５分）のようである。

礎　　石　SB901ａの礎石１～３は、一辺0.25～0.4ｍの割石の立方体。礎石３は、やや大きめの礎石を下にして、矢穴のあるやや小ぶりな礎石がその上に据えられ、高さ調整がされているようである。また、礎石２は上面に「馬」と朱書きされていた。SB901ｂの礎石４・６は、平面の一辺が0.33ｍの装飾的な礎盤が転用されており、上面に正方形のホゾ穴がある。その他の礎石は、一辺0.25～0.3ｍの立方体の割石であり、礎石９には割れが入っていた。SB901ａ・ｂは１棟の礎石建物の一部と考えられるが、前述の石垣の所見ではSB901ａの下の石垣は積み直しがされている。

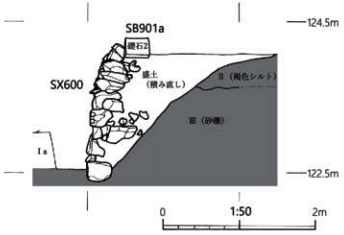
出土遺物

堀跡サブトレンチ埋土、石垣天端の検出面、石材の間、根石検出サブトレンチから、中近世陶磁器、古銭、近現代ガラス瓶などが出土している（写真第４図版）。

陶　磁　器　盛岡城遠曲輪築城以前、中世の輸入青磁碗高台部（中国または朝鮮産、15～16世紀）、染付角皿底部（中国産、16～17世紀）破片が、RA002竪穴建物跡の表土・攪乱部分から出土している。築城後となる近世磁器の肥前染付は、徳利（17～18世紀）、碗（コンニャク印判、18世紀代）、湯呑・蓋（18～19世紀）、輪花皿（蛇の目高台、18世紀後半～19世紀）の破片が出土している。瀬戸・美濃染付は19世紀以降の碗、湯呑、蓋の破片が出土し、焼継の修復痕もみられる。また、幕末に盛岡で開窯された山藍焼（茶畑一丁目所在）の染付碗・輪花皿・湯呑の破片、花古焼（東新庄二丁目所在）の碗の破片が出土している。

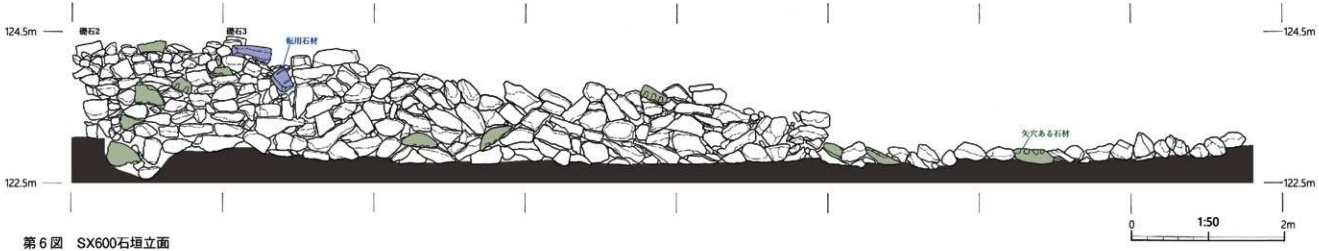
古　　銭　寛永通宝が３点出土しており、文字が判読できたものは新寛永（1668年以降）であった。

ガラス瓶　大正～昭和初期のサイダー瓶、一般用薬瓶、目薬瓶、化粧クリーム瓶、代用陶磁器、昭和20年代の舐め菓子瓶が出土しているが、詳細は別稿にて報告を行う。



第７図　SX600石垣断面

近現代ガラス瓶



第６図　SX600石垣立面